

戦後の昭和歌謡 について《3》

山形 俊男

(昭和39年機械科卒)



※昨年号の続き

● 名曲を作った作詞・作曲者の苦悩

(10) 《思い出さん今日は》

作詞【星野哲郎】 歌【島倉千代子】 昭和33年

横浜開港百年を記念して“港の歌”の作詞公募が行われたのは、昭和32年(1957)の春だった。横浜市が主催、新聞社や雑誌社が後援し、当選した歌はコロムビアの看板スター・美空ひばりによって歌われる事になっていた。この大イベントに公募して「浜っ子マドロス」と「みなと踊り」で1位、2位を獲得したのが星野哲郎だった。

審査員の一人だった作曲家船村徹は、星野の才能を認めて上京を促し、山口県の周防大島(すおうおおしま)から作詞家を目指して上京した。吉祥寺に下宿を見つけて、せっせと書き溜めた詞を、各レコード会社に売り込みに歩いたが、体のいい門前払いであった。失意に沈む星野に、「これでも読んで何か一発パツとした詞を書いて見る!」と、励ましの言葉を掛けたのが船村徹だった。船村の手には、当時ベストセラーのフランソワーズ・サガンの『悲しみよこんにちは』があった。自分より、2、3歳若い船村に“港の歌”公募で1、2位ダブル当選させた陰の人として、星野は深い恩義を感じていた。しかしサガンの『悲しみよこんにちは』を読んで「明日までに一遍の詞を書いて来い」の厳命は重荷だった。星野は窮余の一策として小説とは関係なくタイトルから啓発された「思い出さん今日は」の詞を書いて、翌日船村を介してコロムビアに届けた。しかし苦心の作はディレクターからボツ扱いで戻された。星野はレコード会社のこの対応に、作詞人生に見切りをつけて山口県周防大島に帰った。その彼を追いかける様に、「急ぎ上京サレタシ」の電報が届く。コロムビアからの呼び出しだった。上京して見ると、「思い出さん今日は」は、帰郷する時にボツ扱された詞を、ダメモトで雑誌『平凡』の懸賞募集に投稿したものだった。それが当選してコロムビアに回されて来たものと分かった。



星野哲郎
昭和30年代

歌は“泣きぶし”の島倉千代子、作曲は大御所古賀政男だった。星野にとって降って湧いたような幸運だった。吹き込みは翌日で作詞家として立ち会う事になった。作曲家古賀政男に紹介されると、「君が星野君か、いい詞を書いて下さってありがとネ」と、いかつい姿に似合わずオネエ言葉で礼を言われた。当時はオーケストラと歌の同時録音だった。指揮者は古賀氏で、バンドの面々は緊張していた。その中であって少女の面影を残す島倉千代子は、すでに多くのヒット曲を持っているだけに毅然としていた。こうして「思い出さん今日は」は、星野哲郎にとって初ヒットになった。星野はこれを機にコロムビアの作詞家として迎え入れられた。

● 名曲を歌った歌手人生の苦悩(11)~(13)

(11) 《からたち日記》 歌【島倉千代子】 昭和33年

昭和を彩(いろど)った美空ひばり亡き後、演歌の女王の地位を占めた島倉千代子。「ステージで死ねたら本望」と言われる世界で、死去する3日前に60周年記念歌「からたちの小径」を自宅で録音した後、「人生の最後に、素晴らしい素晴らしい時間を有難うございました」と終焉(しゅうえん)の挨拶を述べていた。歌手生活最後の新曲を吹き込み、永別を告げた歌手は、日本の歌謡史では空前絶後だろう。

島倉千代子は昭和30年16歳で「この世の花」でデビューし、「りんどう峠」「逢いたいなアあの人に」「東京だよお母さん」と、毎年のようにミリオンセラーを出した。昭和33年に西沢爽作詞、遠藤実作曲の「からたち日記」を歌い、セリフ入りの歌は売れないと言うジックスを吹き飛ばし、130万枚の大ヒットをした。最後に歌った「からたちの小径」の原点だった。作曲した遠藤実は、流しの傍(かたわ)らマーキュリーで作曲していて、演歌作曲の新人として注目されていた。その遠藤をコロムビアの馬淵玄三ディレクターが、島倉千代子の新境地を切り拓くために起用したと言う経緯があった。島倉千代子のファンで、彼女の歌を作曲して見たいと願っていた遠藤は、死に物狂いで取り組んだ作品だった。歌手生活では、栄光そのものに見えた島倉千代子だったが、私生活では“不幸のデパート”と呼ばれていた。家族の反対を押し切って、プロ野球選手の藤本勝巳(阪神の本塁打王)と結婚したものの歌手生活を続けるため3回の中絶をした挙句に離婚。千代子を歌手へと導いてくれた姉は自殺。恩人と信じた眼科医には乞われるまま実印を貸したため、雪ダルマ式に膨らんだ総額16億円の莫大な借金の返済。実弟を社長にした芸能プロダクションの使い込み事件等々。それに加えて7歳の頃に、長野の疎開先で雨の日に井戸から水を運ぶ途中で、山道で転倒してピンを割り左手に大怪我を負い左手切断を余儀なくされた。母親の必死の懇願で切断だけは免れた。その時の輸血でC



島倉千代子

型肝炎にかかり、それが彼女の死を早める肝臓癌の引き金になった。NHK紅白歌合戦には35回出場し歌手としては最高の名誉である紅組のトリを6回、大トリを1回体験。“泣きぶし”と言われ、高音が細く泣いているように聴こえる唱法だった。何回となく騙され、傷ついた島倉千代子だったが、人を疑がわれない人柄が愛されて、後輩歌手からは姉のように慕われていた。

(12) 《こまっちゃうナ》 歌【山本リンダ】 昭和41年

遠藤実作詞・作曲の「こまっちゃうナ」は、日米の混血児に生まれた山本リンダのちょっと舌足らずの少女っぽい唱法で大ヒットし、子どもたちに好んで歌われた。昭和41年9月、遠藤実の名前に因んで創業されたミノルフォン・レコードから発売されて話題になった。歌詞が意表を衝いていた。

こまっちゃうナ デイトにさそわれて
どうしよう まだまだ早いかしら

山本リンダが、この歌を歌ったのは15歳だった。

遠藤実が創業して間もないミノルフォンに人気歌手を育てるべく画策していた。ある日遠藤実の車中横に山本リンダが同乗する機会があった。そこで遠藤実がリンダにさりげなく「いま付き合っている人がいるの?」と聞いた。リンダは憧れの人からの突然の質問だったので舞い上がってしまい(そんな事訊かれて)「リンダ困っちゃう」としか答えられなかった。この「困っちゃう」の言葉が遠藤実には妙に心に残り、彼女のためにその年頃の心情を、明るく軽快な作詞・作曲したのが「こまっちゃうナ」である。

リンダは朝鮮戦争で戦死した米国軍人と日本人の母の間に九州の小倉で生まれた。4歳の時、横浜に引っ越して来たが、ハーフだったので酷(ひど)い虐(いじ)めに遭(あ)った。家が貧しかったためリンダは母を楽にさせたいとモデルのオーディションを受けた。混血児のスタイルと美しさが認められ人気モデルからタレントの道が開けたのはそれからである。しかし、デビュー曲「こまっちゃうナ」が大ヒットした後は、これと言うヒットには恵まれず人気は低迷。リンダの第2次ブームがやって来るのは、昭和46年キャニオン・レコードに移籍して第2弾目のシングル「どうにもとまらない」を発売してからである。ヒットメーカーの阿久悠・都倉俊一のコンビでセクシーな大人の歌手にイメージチェンジ。真っ赤なブラウスの裾を結んでへそを出し、深いスリッパのパンタロンをひらめかせて煽情的に踊りながら、歌って大ヒットさせたのだ。「どうにもとまらない」が爆発的にヒットすると、阿久悠は、おりからの狂乱株価の動きを示す言葉をフレーズに使う「狂わせたいの」「じんじんさせて」「狙いうち」「燃え尽きそう」と、およそポップス系の歌のタイトルには馴染まない歌を、都倉とのコンビでシリーズ化させた。株価暴騰に乗じたこのシリーズ歌はいずれもヒットする。わけても昭和48年に発売した「狙いうち」が大ヒットし、第10回ゴールデン・アロー賞グラフ賞。キャニオン・レコードヒット賞も受賞した。「狙いうち」のタイトルは、野球の試合でボールをヒットさせる事を想定させる事から、阿久悠の母校明治大学の応援団は「チャンス到来」の時に歌う様になった。それが高校野球にも伝播して、応援歌の定番曲になった。

(13) 《よこはま・たそがれ》 歌【五木ひろし】 昭和46年

五木ひろしは、北島三郎、森進一らと共に演歌を代表する歌手である。初ヒット「よこはま・たそがれ」に巡り遭うまでの道のりは遠かった。昭和46年1月「よこはま・たそがれ」で4度目の勝負に出た。3度目ならぬ4度目というのは、「松山まさる」「一条英一」「三谷謙」など芸名を次々変えて「デビュー」を図ったがヒットに恵まれず苦労していた。彼は昭和23年福井県に生まれ中学校卒業後、京都へ出て音楽学校へ通い、上京後は上原げんとに師事して、コロムビア歌謡コンクールに優勝



五木ひろし

するなど足は好調だった。そして松山まさるでデビューを果たすが、2弾目が出ず、芸名を一条、三谷と変えながら、ギターの弾き語りでも再起を図っていた。実力がありながら再デビューが叶わなかったが幸運の転機が巡って来た。日本テレビの全日本歌謡選手権で10週勝ち抜いた事だった。(彼はこのテレビ番組で駄目だったら歌手生活を辞めて故郷に帰ろうと背水の陣で臨んでいた)作詞家山口洋子に認められた事がその後の幸運に繋がる。山口は人気作家五木寛之にあやかって、五木ひろしと芸名を付け「よこはま・たそがれ」を歌わせた。作曲は平尾昌晃に依頼。斬新な詞に合わせたメロディーだった。染め直しの新人五木ひろしもこの曲に歌手生命を賭けていた。歌が抜群に上手いのに、何故芽が出なかったのか…。山口洋子はその原因を探るうちに、①レコード大賞獲得②正月公演を大劇場で開けさせる③NHK紅白歌合戦でトリを獲ったら、絶対大輪の花を咲かせると踏んだ。この3つの夢を果たすべく邁進する。五木ひろしに対する山口洋子の悲願は、次々に果たされ、昭和48年12月彼女の作詞「夜空」で日本レコード大賞を受賞したのを最初に、NHK紅白歌合戦のトリは、昭和50年「千曲川」でついに叶えた。この歌も山口洋子の渾身の作であった。

● 歴史を彩った名曲の秘話

(14) 《王将》 歌【村田英雄】 昭和36年

「王将」はそのタイトルからして分かるように、新国劇や映画で有名になった関西の名棋士、坂田三吉がテーマだ。板東妻三郎や三船敏郎の名演技で知られた「無学文盲」の、吹けば飛ぶような将棋の駒に、生命(いのち)を賭けた天才棋士である。

これを歌ったのが、浪曲師上がりで古賀政男にスカウトされ、演歌の大御所の曲をはじめ32枚のレコードを出しながら、3年余り芽が出なかった村田英雄である。

村田の焦りを見て、転機とすべく彼を作詞界の大御所、西条八十に引き合わせたのが、コロムビアの斎藤昇ディレクターだった。斎藤は西条に不振脱出となる詞を書いて貰う肚だった。しかし当時、美空ひばりの歌を書いていた西条は、「今は男の歌は書かない。それに詞を書く時は、歌う人間が判らないと書けない」と断られた。西条は村田英雄が流行歌の真髄を未だ掴めていないと判断したのである。しかし西条の詞が何としても欲しい、村田英雄は連日連夜、西条邸へ通い続けて漸(ようや)く、2ヶ月後に彼を男にする「王将」の作詞が渡された。斎藤は「王将」の作曲に新進の船村徹を起用して、芽が出ない村田英雄を蘇(よみがえ)らせようとした。この秘策にはリスクが伴った。古賀は人一倍自尊心が高く、尋常ならざる嫉妬心でも有名だった。しかし斎藤には村田英雄を何としても世に出さねば成らない使命感があった。ディレクターの沽券に賭けて船村に「王将」の作曲を託したのだった。船村は西条八十の詞を手にとると、ふるさと日光市(旧今市市)に曲想を練るために帰った。そこには息子の大成を祈る母が待っていた。船村の顔を見ると直ぐに好物だった手料理を作り始めた。その後ろ姿を見て、人一倍情にもろい船村は「王将」の「吹けば飛ぶような将棋の駒に」の「将棋の駒に」の部分将我に照らして、「演歌の旋律(ふし)に」と変えて見た。するとどうだろう、「王将」のメロディーが次々に浮かんで来た。また競輪レースの大詰に「ジャン」と鳴る銅鑼(どら)の音。男一勝負一銅鑼。男坂田三吉の大勝負には銅鑼の音が相応しい。船村は「王将」の前奏に銅鑼の音を入れる事を思い着く。「王将」は、村田英雄の恩師である古賀政男から船村徹に作曲者を代えた途端、瞬(またた)く間にミリオンセラーになった。



村田英雄

給排水.衛生.空調.設備 設計.施工.設備

HSK 株式会社 北勢工業

質実剛健

代表取締役 太田 博之 (昭和56年 工業化学科卒)
専務取締役 仙北谷 聡 (平成4年 機械科卒)

秋田市仁井田本町5-1-62
TEL : 018(839)6516
FAX : 018(839)6513
http://www.hokusei-kogyo.com

Cofty http://sousai-support.com/index.html

「ご家族安心サポート」のコフティ
コフティ株式会社

■ もしもの時、お役に立ちます!
ご事情に合わせた各種「ご葬儀プラン」で後悔のないご葬儀を提案いたします。
■ 見守りサポート
離れて暮らす高齢のご家族がおられる方などの、安心をサポートいたします。
■ その他各種サポート(手配・販売)
葬祭用供花、フラワーギフト、各種ギフト製品
コロナウイルス感染対策衛生用品 他
※ 詳細は右上アドレスのサイトにてご覧ください。
※ お問い合わせはこちらへ 0120-944-616

〒259-1302
神奈川県秦野市菩提1373-6
TEL 090-7841-0533
FAX 0463-67-7266
e-mail info@cofty.net

代表取締役
菅原 秀樹 昭和54年機械科卒